

共同研究課題

「ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合」

2018年と第5回（通算第7回）研究会要旨（2019年3月24日）

「花喰鳥を待つ」

中村恭子（日本画・AA研フェロー）

日本画の絵画技法には、視界の外部を示唆するものが存在する。現在では日本画にも西洋の透視図法の視点の影響があるが、かつての日本画は、消失点のない視座を持っていた。透視図法の醍醐味は、絵画平面に三次元的な遠近感を生じさせることにある。しかしそれは、消失点に収束し、消失点の向こう側、視界の向こう側を問題にしていないと言える。他方、日本画は視界における遠近感を問題にせず、視界の向こう側を問題にする。山々は、描き割りのような平面として描かれ、その先（裏側）がないことを示している。徹底して、視界に属する山のこちら側と、属さない向こう側は、切れて断絶している。日本画の山の向こう側は、外部なのである。日本画はそのようなアクセスできない外部だけを問題として来たと言える（1）。

本研究制作の《歌手たちはどこから》においては、伊勢物語の宇津の山を舞台とした書き割りの山を描いている。伊勢物語の主人公とされる在原業平は、東下りの際に宇津の峠越えを行う。道中、都に残した思い人を偲んだ歌が以下である。

駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり

奈良時代の人々は、自分を想ってくれている人が夢に来訪すると信じていたとされる。一方、現代人ならば、夢とは現実に対して仮想であり、つまり外部であるとして、現実と外部の関係性を見渡して、区別して、理解する。その上で、こちら側から窺い知れない外部、つまり思い人が来訪するなど信じることはできない。しかしそのような夢と現実の単純な相関や二項の排他性では古代人の現実は見えない。上記の歌でも、地名である宇津の山の宇津と、現在・現実を意味する「うつつ」の音がかかり、この現実である宇津、その「夢～うつつ」の様相が象徴され、二項の排他性が無効化される。

我々も、排他性を無効化し、知覚できないが存在する外部を感じ、やってくるものを待つことができるのではないか。それが、本来的な我々と外部との関係ではないか。この「やってくる」ことの表現に関して、絵画におけるヒントが存在する。花喰鳥がそれだ。花や綬を啜った様々な鳥たちが図案化された文様を、花喰鳥文様と言う。花喰鳥は東西の大陸を渡り、シルクロードを通じて日本にも伝来した。その装飾美は飛鳥から天平にかけて花開き、吉兆の徴として親しまれた。どこか向こう側から鳥が何かを啜えて飛んで来る。花喰鳥は、そのような、外部の徴を運ぶ使者として、知覚できない向こう

側を示す装置と考えられる。

書き割りの向こう側から外部の徴をもたらす花喰鳥を待つことによって、視界とその向こう側、主観的視界と知覚できないが存在する向こう側について論じ、視界の絶壁に絶えず接する向こう側を授かる藝術的手法を探る。

(1) 中村恭子・郡司ペギオ幸夫『TANKURI 創造性を撃つ』(2018) 水声社

「インペアメントのある身体をめぐる笑いについてーバリ島の演劇とその後につづく日常から」

吉田ゆか子 (文化人類学・AA 研)

本発表は、バリの演劇にみられる、身体のインペアメントをめぐるジョークについて考察するものである。バリの道化演者は、欠損や過剰な部分のある身体、吃音や構音障害を含む変わった発声、びっこや痙攣など不規則で突飛な身体の動きを演じる。そして通常、観客はこれを見て大いに笑う。それは、いわゆる「健常者」によって模倣される演技であることも、実際に欠損や不具合のあるいわゆる「障害者」によって演じられるものもある。そして、両者が一つの舞台の上で混在することもある。身体の欠損をめぐる、人々のこの遊戯性に満ちた振る舞いの背景にはどのような文化的な文脈があるのか。このようなジョークによって、人々の身体観はどのように形成されたり、交渉されたり、修正されたりするのか。こうしたジョークを通じて、特に自身が実際の障害を抱える演者たちは、何を成し遂げているのか。本研究では、声のインペアメントをもちながら、そのユニークな発声をジョークに変えて、歌舞劇を演じた女優 Nungah のケース、および視覚のインペアメントがある者たちによって結成されたガムラン演奏グループ Rwa Bineda が「健常者」である道化役者たちと共演したケース、の2つを例にとりながら、上記の問いについて考察した。